

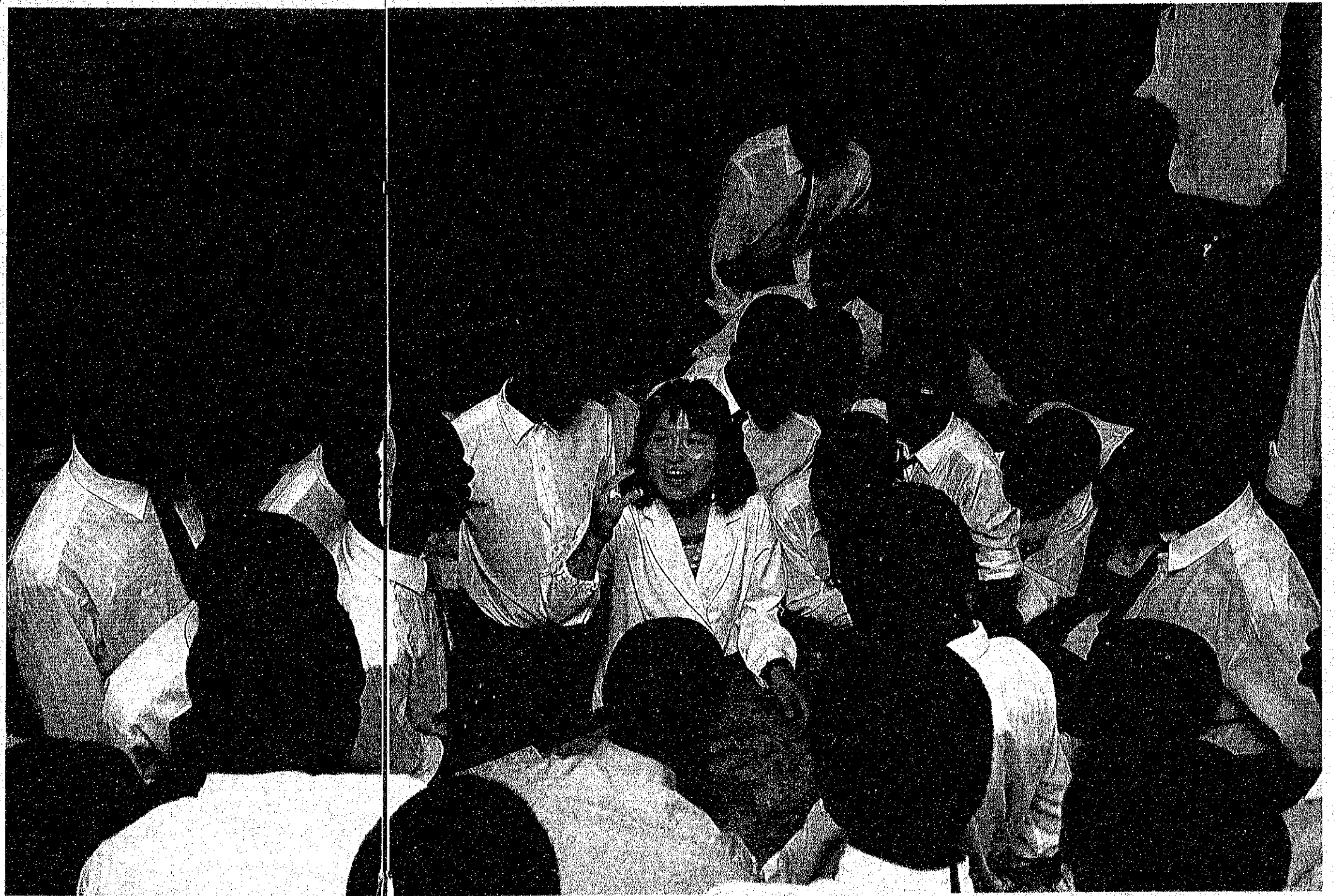
## ザンビア

### 学校内を元気に走りまわる姿 パーク内で野生動物を相手にする姿 ザンビアの地に 隊員の姿はとけこんでいた

首都ルサカより北東に400キロ、自動車でも6~7時間でセレンジェの街に着く。この男子技術中等学校には、化学の授業を担当する理数科教師の女性隊員の活動の姿があった。

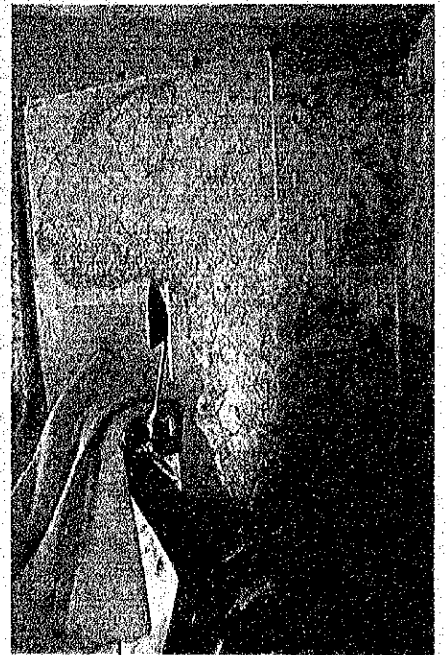
赴任当初、水不足から学校は閉鎖されており、理数科の授業には欠かすことの出来ない実験室の設備など、まず、教育環境の確保から取り組まなければならなかった。現在も教材は決して充分とはいえないが、彼女の授業は、その明るさとアイデアで生徒たちを引きつけている。

セレンジェの街からさらに北東へ300キロのムブエ。ここで生態調査の隊員が、ゾウの糞のカウントによる個体群動態調査、ライオンの季節移動調査、カバのカウント調査など、野生動物を相手にダイナミックな協力活動を繰り返している。時代と共に大自然にも変化が表われているが、日本では到底見ることのできない自然環境の中で、隊員の表情は輝く。



南半球で見るオリオン座は、  
日本とは向きがちがうんです

授業中の理数科教室でももちろん、野外においても渡辺智江子隊員の明るさは少しも変わらない。飾らない彼女の人物は、生徒たちにとどまらず、村人たちや地域にすっかりとけこんで、この地に不可欠な存在となっていた。(前頁上) 同僚の自宅に招かれて、ザンビアの家庭料理を喜ぶ渡辺隊員。(前頁下) 学校の近くで村の子供たちに囲まれて。日本ではあまり見られなくなった草花遊びで、葉っぱの帽子をかぶってハイ、ポーズ



日頃お世話になっている同僚や仲間とトラックの荷台に乗って、近くのクンダリラの滝へピクニックにでかけた。初めて来たので楽しさ倍増だ。(右) 渡辺隊員の自宅に貼られたアフリカの地図。やっぱり広い

### カメラマンノート ③

渡部光哉

アフリカの国々は、雨季を迎えようとしていた。そこで活動を続ける隊員たちも、それぞれの任期の中で、それぞれの季節を過ごしていた。

マラリアの洗礼を受けたばかりの新隊員は、難関を乗り越えたような表情で、これからのアフリカ生活への期待を見せていた。アフリカンアートを吸収し、しっかりと身につけた隊員もいた。雄大な自然を満喫していた隊員は生き生きしていた。涙を流してくれた隊員もまた輝いていた。自分の生徒たちの将来を真剣に願ってくれた隊員。活動の手こたえをやっと感じてきた隊員。任期終了を前に忙しくしていた隊員。みんながそれぞれのアフリカに染まっていた。

何代にもわたり、先輩隊員たちが過ごしたアフリカでの時間の延長上で活動する彼らの時間は、現在の彼ら自身のスタイルでアレンジされて、また引き継がれていく。数日間を共に過ごした彼らアフリカの隊員の姿からは、ちょうどジャカラングの花の輝きのような、あるいは大地に根を下ろし天に両手を広げたバオバブの木のようなイメージを受けた。

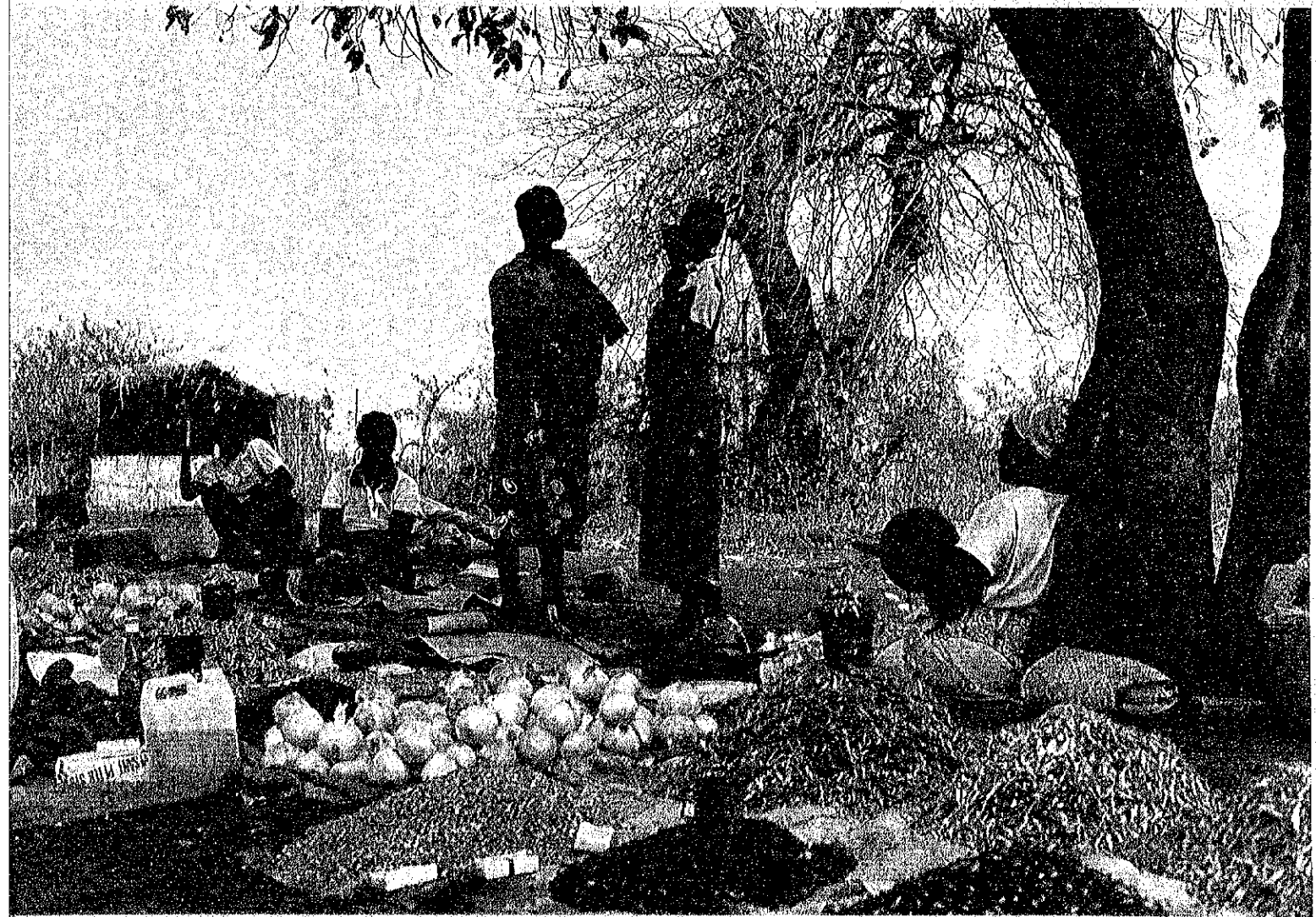
彼らは毎日、広大なアフリカの大地と人々の中に若いエネルギーを放っている。そしてそれ以上のエネルギーを、アフリカの自然と現地の人々から受け止めながら活動を続けている。

隊員の数だけ誕生する「アフリカ物語」は、今、彼ら自身によって次々と仕上げられている。

アフリカのエネルギーと、大切な「アフリカ物語」の中へ、私も引き込んでくれた隊員の皆さん、ありがとう！そしてガンバレ！



マンゴーの木の下で遊ぶ子供たち。ムフェ村にて



とりたての食物が並ぶムフェ村のマーケット



一日も早く大きくなって自然に帰れ

「奴候も仕事もハードだが、野生動物に囲まれた素晴らしい環境の中で日々を送れるだけでも幸せ」と川辺で休み、遠くの野原を駆けめながら今栄博司隊員は話してくれた。(上) 死後間もないブクの死体を発見。調査用サンプルとして同行のスタッフと採取作業をはじめ。学術的にも価値ある調査だ。(下) ナイトサファリに同乗、木に登りインパラを食べるヒョウに出会った。(次頁上) 沼で動けなくなったバツファローを救出するため、首にロープをかける。これは非常に危険な仕事で、もしもの時のためにハンターも同行。(次頁下) ロッジに保護された選子のゾウと遊ぶひととき

